

特集

エキスパートから学ぶ 婦人科ロボット手術 update

企画者のことば

熊切 順*

ロボット支援下手術の代表的な機器としては1990年代に米国で臨床機器として開発されたda Vinci surgical systemが挙げられます。2018年4月の診療報酬改定により子宮体癌と良性子宮疾患に対するロボット支援下手術が保険収載されました。産婦人科領域におけるロボット支援下手術はこれまで先進医療もしくは自費診療で行われてきましたが、この保険収載により2020年3月の現時点で多くの施設で施行されるようになってきています。

ロボット支援下手術の利点として、腹腔鏡下手術と同様に低侵襲な手術であり患者負担が少ないことが挙げられます。また、鮮明な3Dハイビジョン拡大視野と多関節のロボット鉗子、手振れ防止機能により人間の手より広い可動域かつ繊細な腹腔内操作が可能となります。このため、開腹術や腹腔鏡下手術と比較してロボット支援下手術の習熟のラーニングカーブが早いとされています。一方、ロボット支援下での腹腔内操作である視野確保や術野展開では、術者単独で進行させなければならないことから特有の慣れが必要とされます。また、腹腔鏡下手術

と異なり高額なデバイスが必要とされることから、症例あたりに負担しなければならないコスト高の問題もあります。そこで、ロボット支援下手術を開始した各施設において、これらの問題を解決するための対策として様々な試みがなされているものと考えられます。

ロボット支援下手術の有用性に関しては、子宮体部悪性腫瘍に対して海外では多く報告されています。一方、子宮良性腫瘍に対しての施術についてはいまだ結論が出ていません。また近年における子宮頸癌に対しての低侵襲手術の有用性についての報告でも、ロボット支援下手術が外科的治療の第一選択枝とはなっておりません。したがって、本手術を普及させるためにはわが国における展開とデータ集積が必要と思われる。

本企画ではロボット支援下手術の現状および将来と各施設におけるロボット支援下手術に対する工夫についてエキスパートの先生方よりご寄稿いただきました。本編をご参考にしていただき、今後のロボット支援下手術を開始される諸先生方のお役に立てればと考えております。

* Jun Kumakiri 東京女子医科大学産婦人科